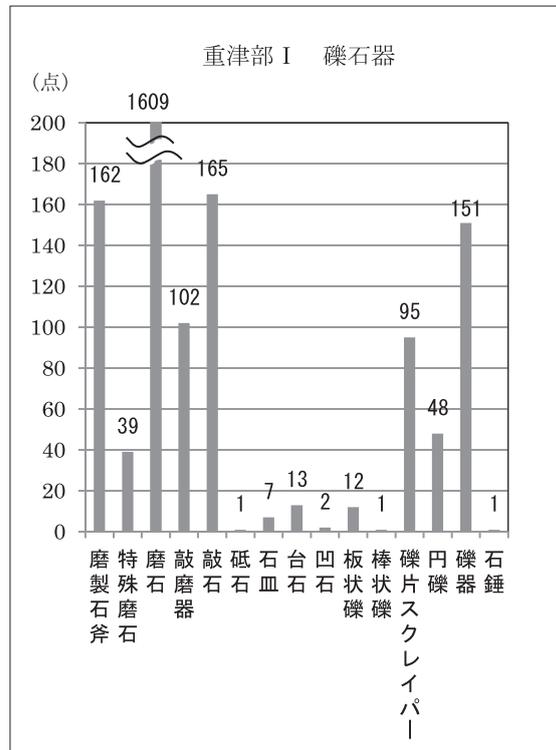
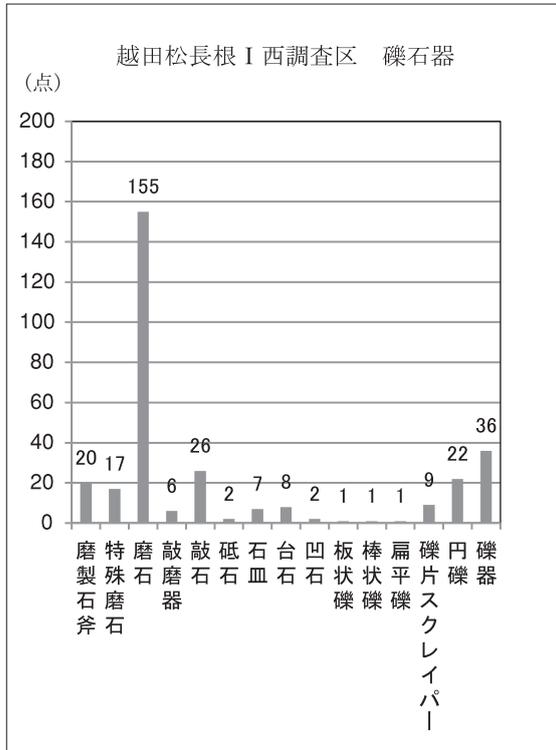
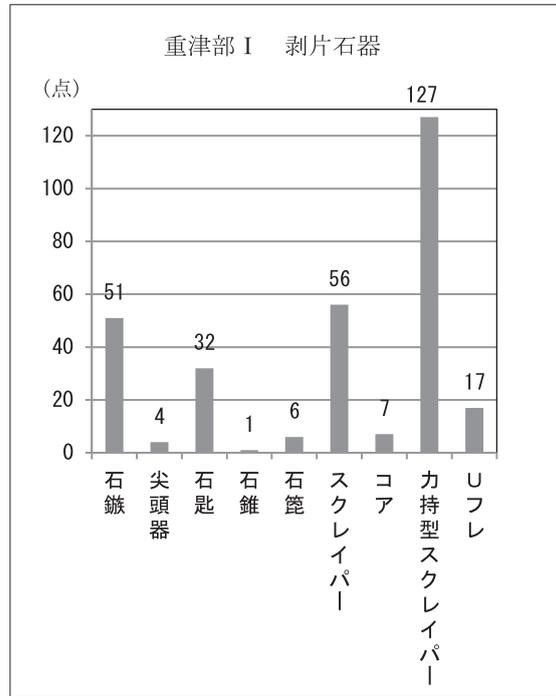
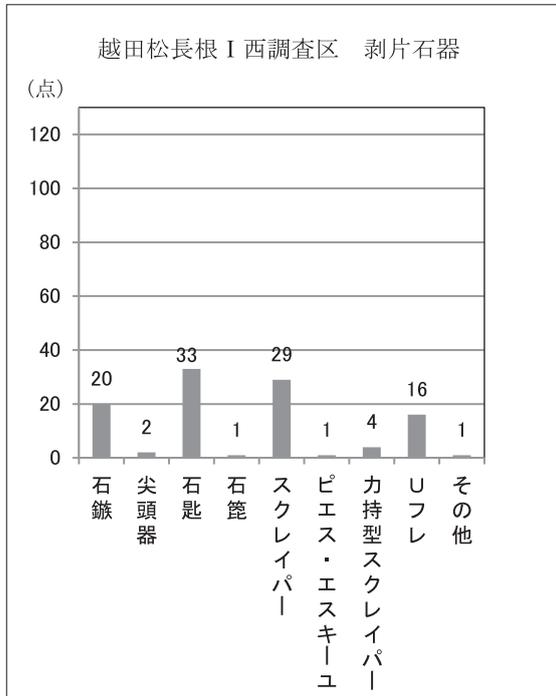


2 遺物

この、力持型スクレイパーの地域色や時期にみる出現性などを模索する目的で、同じく宮古市田老地区の縄文前期前葉を中心とする集落遺跡である越田松長根Ⅰ遺跡の西調査区の石器組成を比較資料として示した。



第15表 縄文前期初頭～前葉の石器組成比較表

〔越田松長根 I 遺跡について〕越田松長根 I 遺跡は、本遺跡から南へ直線距離で 5 km に位置する縄文前期～後期及び弥生・古代に亘る複合集落遺跡である（※調査報告書は岩手埋文第 666 集として平成 29 年 2 月末に発行予定）。この越田松長根 I 遺跡の西調査区は、縄文前期初頭～前葉の竪穴住居跡が 24 棟検出され、土器の出土状況としては縄文前期前葉大木 1 式を中心に前期初頭上川名 2 式が出土している。大木 2b 式や白座式などは数点の出土で、大木 2a 式は認知していない。従って、越田松長根 I 遺跡の西調査区で出土した石器の帰属時期は、大木 1 式を中心に縄文前期初頭～前葉（上川名 2 式～大木 1 式期）の時期幅にほぼ限定できると判断される。従って、両遺跡ともに、縄文前期前葉を中心とする遺跡であるものの、重津部 I 遺跡は上記のとおり大木 2b 式を中心とすることから前期前葉の後半段階、越田松長根 I 遺跡は前期前葉の前半段階を主体とする集落で、微妙な時期差が看取される。

〔両遺跡の共通点〕両遺跡の共通点を模索してみる。剥片石器は、石鏃、石匙、スクレイパー、U フレなどは両遺跡ともに一定量が出土し、尚且つ尖頭器、石篋、石錐が少ない（特に石錐は越田松長根 I 遺跡の西調査区からは 0 点、重津部 I 遺跡では 1 点の出土である）。礫石器は、両遺跡共に磨石が圧倒的に多く、尚且つ特殊磨石、磨製石斧、敲石、敲磨器の割合も近似する。また、石皿・台石や、凹石、砥石が少ないことも同様である。上記した器種の組成割合はほぼ同様と云えることから、本地域の縄文前期前葉の石器組成の特徴を捉えていると判断されよう。

〔両遺跡の相違点〕相違点を模索すると、剥片石器、礫石器共に数量では本遺跡（重津部 I 遺跡）の方が圧倒的に多い。およそ 3 倍の出土点数である。参考までに、重津部 I 遺跡の中央調査区の調査面積は約 2,000 m²（※重津部 I 遺跡全体では 8,000 m²であるが、遺構・遺物の集中する中央調査区は約 2,000 m²の空間である）で住居跡 6 棟であるのに対して、越田松長根 I 遺跡西調査区は調査面積 4,025 m²、住居跡 24 棟である。机上の計算では、重津部 I 遺跡が 1 棟あたり 451 点であるのに対して、越田松長根 I 遺跡が 1 棟あたり 17.5 点となり、数値だけみれば重津部 I 遺跡の方が盛んに石器制作を行っていた可能性もある。ただし、重津部 I 遺跡は、調査地外の範囲に集落本体が所在する可能性も否定できないので、強く言及できる内容ではないことを付記しておく。

〔力持型スクレイパーの出土割合〕次に、石器組成での大きな違いとして、力持型スクレイパーの出土割合が挙げられる。剥片石器に占める割合は、重津部 I 遺跡では 127 点で剥片石器の 42% を占めるのに対して、越田松長根 I 遺跡では 4 点の出土で石器全体の 4% である。この違いは何に起因するのか。遺跡の立地を比較すると、両遺跡ともに海岸線からの距離や遺跡の標高値、谷地形など立地する地形的環境は類似性が高い。このことは、生業や用途の違い以外に主体時期の微妙な違いが反映していることも考えられる。従って、大木 2 式期（※大木 2a 式と大木 2b 式を合わせて）が、力持型スクレイパーの制作される中心時期である可能性を示唆させるものと小結しておく。

県内の類例について、詳細な集成などを行っていないため、力持型スクレイパーの詳細な分布や時期による出現性などはこれからの検討課題であるが所見を記述すると、普代村力持遺跡では縄文前期前葉に限らず中期まで存続した可能性があり、陸前高田市袖野 I 遺跡や大船渡市田代遺跡では大木 2a 式期の可能性が示唆される状況にある。また、当センターで調査を実施した前期前葉の集落遺跡である久慈市芦ヶ沢 I 遺跡でも出土を確認できる。従って今後の課題を整理すると、①沿岸部以外に内陸の遺跡で出土しないかどうか、②前期前葉以外の時期で出土するのかどうかなどを挙げておきたい。

3 ま と め

今回の調査成果をまとめてみる。

[遺構・遺物の集中範囲] 遺跡は沢地形の南向き緩斜面を中心に広がる。遺構・遺物が集中するのは中央調査区沢跡の北岸付近にはほぼ限定される様相にある。沢跡の南岸は土坑2基（1基は円形の陥し穴の可能性あり）のみ、沢跡より南側や沢跡から離れた北調査区などでは遺構・遺物ともに非常に少ない（ほとんど皆無にある）。

[主体時期] 縄文前期前葉で特に大木2b式が多い。留意点として、縄文中期や弥生後期が沢跡の上流にあたる調査地西側に存在する可能性が示唆される。

[縄文前期前葉竪穴住居跡の変遷] 縄文前期前葉の竪穴住居跡が上下に重複して検出された。古い方から5号住→4号住→3号住の順に変遷する。これらの竪穴住居跡は、平面プランが不明瞭であったことから、試掘トレンチを入れ土層断面から把握に努めた精査内容から、平面・規模などには不透明感が残るものの、出土土器は層位的新旧関係を持って取り上げられた。一番新しい3号住は、埋土の最上位にTo-Cuが堆積し、その下位の堆積層から纏まった量の土器が出土した。この3号住出土土器の時期は大木2b式で、白座式が共伴する。4号住は土器量こそ少ないが大木2a式が含まれる（※大木2a式期と推定される）。5号住も土器量は少ないが大木1式期あるいは大木2a式期の可能性がある。この内、3・4号住は調査区外東側に延びることから長軸長は不明にある。形状や短軸長の在り方から3号住は大形住居に分類される可能性を有する。4号住は大形住居とは判断できないが、その可能性は残る。5号住は小形～中形（普通サイズ）の規模で、形状も楕円形に近い。

[縄文前期初頭・前葉土器] 縄文前期初頭～前葉の土器が纏まった量出土した。前期初頭は口縁部文様を見る限り、東北地方南部を中心に分布する上川名2式と捉えられる土器である。ただし、住田町小松I遺跡など県南部の土器と比較して器形に若干の相違が窺える。加えて、口縁部の文様を見る限り、東北地方北部の長七谷Ⅲ群土器は本遺跡には認め難い。地域差なのか時期差なのか、この内容が何を意味するのかは今後の検討・研究に委ねたい。前期前葉は、特殊性の高い縄文原体である組縄縄文を施文する土器が出土した。それらは、大木1式若しくは大木1式の直前期の可能性を有する（註2）。

[To-Cu テフラと大木式土器の関係] 今回の調査では、To-Cu下位から大木2b式が出土している。加えて、同一個体に大木2b式と白座式の両者の特徴を有するものが複数点認められた（註3）。

[石器組成] 礫石器が圧倒的に多く、剥片石器や石製品が少ない遺跡であることが分かった。また、力持型スクレイパーと仮称される片面に礫面が残り、片面にのみ簡易的な剥離が施され、刃角は鈍角をみる石器が特徴的に出土している。

最後に、今回の調査成果が今後の地域史解明の一助となり、さらには何らかのかたちで沿岸復興の推進に寄与することを願う次第である。

註

（註1）入稿後に、千鷲遺跡遺構外出土土器の中に口縁部形状がキャリパー状を呈するものが数点認められることを知る。従って本地域の当該時期に全く無いとは言い難い。ただ、少ない傾向であることは言及できるものと調査判断しておきたい。

（註2）釜石市屋形遺跡では大木1式と推定されている。また、報文では前期初頭～大木3式までの土器口唇部断面形状の分

析が行われているが、大木 2a 式では平坦が多く、大木 2b 式は丸いものが多いという差異が指摘されている。この内容は本遺跡資料にも該当する可能性が高く、大木 2 式を巡る着眼点の一つになり得ると考えられる。

(註 3) 本遺跡では大木 2b 式が To-Cu テフラの下(テフラより古い)と判断された。ただ、県内の事例を見る限り大木 2b 式と To-Cu の上下関係は“微妙”である。あるいは大木 2b 式は To-Cu テフラを跨いで出土する可能性で保留されると捉えられる(星・茅野 2006)。次の大木 3 式は厳密には今後の検討を待ちたいが、複数遺跡で To-Cu テフラの上で出土が確認されている状況から、現段階ではテフラ降下期後と捉えて良いと考える。また、大木式土器と“今日”白座式の並行関係について、問題提起を兼ねて記述すると、最近の県内事例からは大木 2b 式と大木 3 式の両者に共伴事例がある。最大の時間幅を持って、大木 1 式までは遡らず、大木 4 式までは下らない。従って、白座式と To-Cu の上下関係についても、大木 2b 式と同様にテフラの上下で出土する可能性も考えられよう。上記した内容について、今後さらに検討・検証されることを願う次第である。

参考文献

<論文関連>

- 相原 淳一：1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第 76 巻第 1 号 P 1～65 日本考古学協会
- 岩手 県：1973『土地分類基本調査－田老－』国土調査岩手県企画開発室(北上山地開発)
- 小林 達雄監修：2008『総覧縄文土器』
- 鎌田 祐二：1989「千鶏遺跡 4 まとめ」『千鶏遺跡発掘調査報告書』宮古市教育委員会 宮古市文化財調査報告書 16 p 133～144
- 熊谷 常正：1983「岩手県における縄文時代前期土器群の成立－条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ」『岩手県立博物館研究報告』第 1 号 p 45～65
- 熊谷 常正：1989「岩手県内の早期後半から前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第 4 回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会
- 佐藤 達夫：1983「青森県上北郡早稲田貝塚」『東アジアの先史文化と日本』p 224～283
- 佐藤 則之：1996「上川名Ⅱ式土器」『日本土器辞典』p 308 大川清・鈴木公雄・工楽善通
- 渋谷 賢太郎・澁谷昌彦：2014「多縄文系土器における原体・手法・効果の解体」『縄文時代』25 号 縄文時代文化研究会 縄文セミナーの会：1994『第 7 回縄文セミナー早期終末・前期初頭の諸様相－記録集－』
- 須原 拓：2007「縄文時代前期の大形住居について－大木式土器文化圏の事例を中心に－」『紀要 X X VI』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 菅谷 通保：1987「縄文時代特殊住居論批判－大形住居研究の展開のために－」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 4 号 東京大学文学部考古学研究室
- 高橋 亜貴子：1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念 p593～632
- 田中 和之：2008「羽状縄文土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 p234～241
- 辻 誠一郎：2006「三内丸山遺跡の層序と編年」『植生史研究特別』第 2 号 p 23～48
- 名久井 文明：1971「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』57 巻 2 号日本考古学協会 p 1～25
- 二本柳 正一・角鹿扇三・佐藤達夫：1956「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』43-2 p 35～58
- 早川 由紀夫：1983「十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代」『火山』第 2 集第 3 号 p 263～273
- 早瀬 亮介：2009「前期大木式土器の変遷と地域性－編年研究の現状と課題－」『日本考古学協会 2009 年山形大会研究発表資料』p 273～282
- 早瀬 亮介：2008「前期大木式」『総覧縄文土器』小林達雄編 p226～233
- 星 雅之、茅野嘉雄 2006「十和田中振テフラからみた円筒下層 a 式土器成立期の土器様相」『植生史研究特別』第 2 号
- 星 雅之：2007「十和田中振テフラの考古学年代について－課題などを中心に－」『岩手県における縄文文化の諸様相』2007 岩手考古学会第 38 回発表資料
- 三宅 徹也：1989「早稲田 6 類と表館式の関係」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第 4 回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会
- 武藤 康弘：1987「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究－表館式、早稲田 6 類土器をめぐる－」『考古学雑誌』第 74 巻第 2 号日本考古学学会 p29～51
- 武藤 康弘：2008「表館式・早稲田 6 類土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 p210～217

3 まとめ

<他県報告書関連>

東北大学大学院文学研究科考古学研究室 角田市教育委員会：2008『阿武隈川下流域における縄文貝塚の研究－土浮貝塚－』
角田市文化財調査報告書第33集

青森県教育委員会：1980『長七谷地貝塚』「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書 昭和53年度第2次発掘調査」 青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集

青森県階上町教育委員会：1989『白座遺跡・野場遺跡(3) 発掘調査報告書』

<岩手県報告書関連>

岩手県教育委員会：2016『岩手県内遺跡発掘調査報告書』（平成26年度 復興関係） 岩手県文化財調査報告書第146集

大船渡市教育委員会：2006『田代遺跡発掘調査報告書』

滝沢村埋蔵文化財センター：2008『仏沢Ⅲ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』 滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集

宮古市教育委員会：1989『千鷲遺跡発掘調査報告書』 宮古市文化財調査報告書16

宮古市教育委員会：1995『崎山貝塚発掘調査報告書』 宮古市文化財調査報告書44

陸前高田市教育委員会：2010『袖野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 陸前高田市文化財調査報告書第28集

<財団法人岩手県文化振興事業団（埋蔵文化財センター）発行報告書など（発行年順）>

岩手埋文1983：『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第52集

岩手埋文1994：『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集

岩手埋文2000：『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集

岩手埋文2000：『峠山牧場Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第320集

岩手埋文2001：『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集

岩手埋文2004：『小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第433集

岩手埋文2009：『本波Ⅷ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第536集

岩手埋文2014：『屋形遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第629集

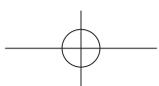
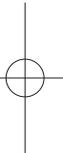
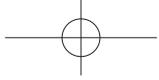
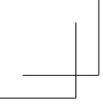
岩手埋文2014：『平成25年度発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集

岩手埋文2015：『鳥越Ⅱ遺跡・鳥越ⅩⅣ遺跡・菅窪遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第645集

岩手埋文2016：『向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第657集

岩手埋文2016：『青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第658集

写真図版





重津部Ⅰ遺跡遠景（南から）



調査着手時全景（南から）

写真図版1 着手時状況と遺跡遠景



調査地全景 直上から(上が北)



中央調査区全景 直上から(上が東)

写真図版2 調査地航空写真



第1トレンチ 南から



第2トレンチ 東から



第5トレンチ 北西から



第9・10トレンチ 北西から



第7トレンチ 北から



第12トレンチ 北から



第12トレンチ 北西から



重機掘削状況 南から

写真図版3 中央・南調査区トレンチ調査



第32トレンチ 北西から



第33トレンチ 北西から



第34トレンチ 南東から



第35トレンチ 南から



第36トレンチ 北西から



第36～39トレンチ 南から



第40トレンチ 南から



トレンチ配置状況 南から

写真図版 4 北調査区トレンチ調査

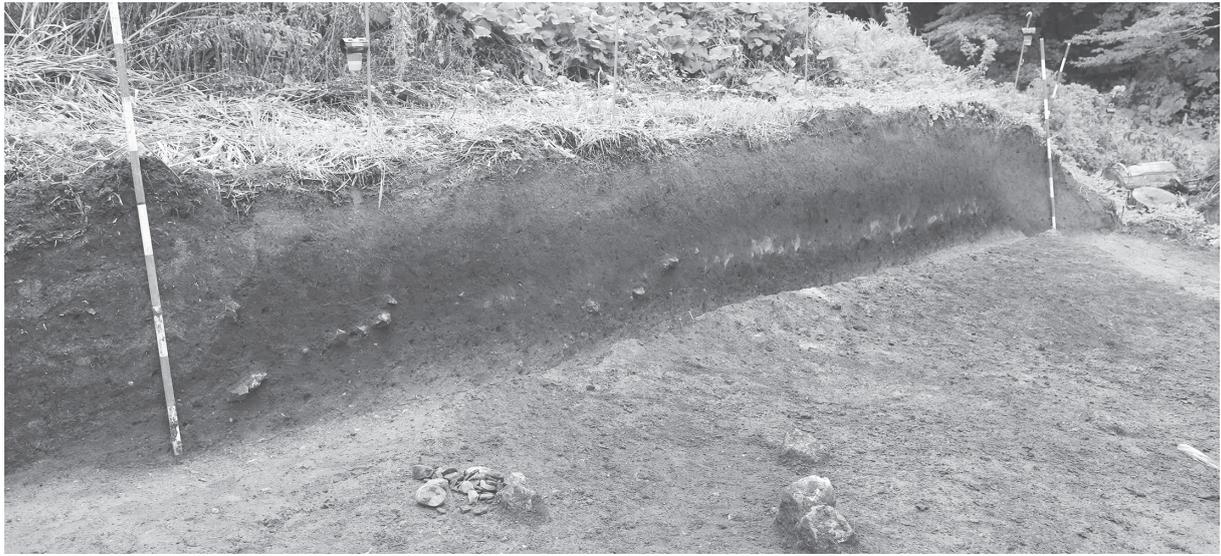


沢谷頭トレンチ断面 西から

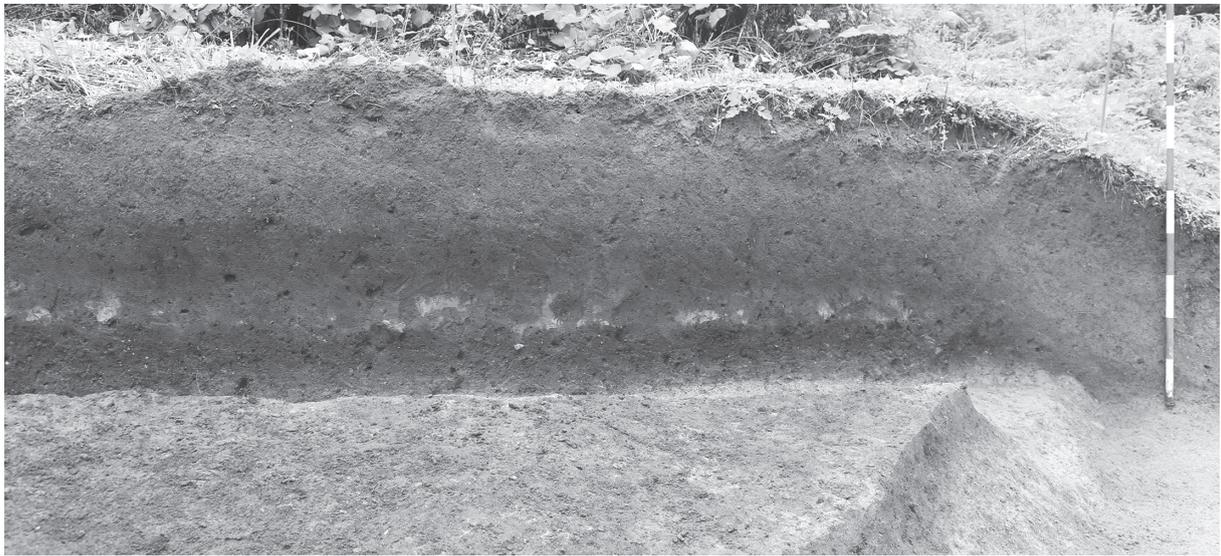


沢南北トレンチ断面 南西から

写真図版5 沢トレンチ調査



中央調査区東壁地層断面 北西から



中央調査区東壁地層断面細部 西から



中央調査区C IV a 7ライン地層断面 西から

写真図版6 基本層序（1）



北調査区南部地層断面 西から



北調査区南部地層断面 北西から



北調査区南部地層断面 北から

写真図版7 基本層序 (2)



全景 南から

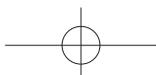


検出状況 南から



Aベルト 西から

写真図版8 1号住





全景 西から



検出状況 南から



Aベルト 西から

写真図版9 2号住



全景 西から



全景 南西から

写真図版10 3号住(1)



焼土3 南から



焼土4 南から



焼土6 南から



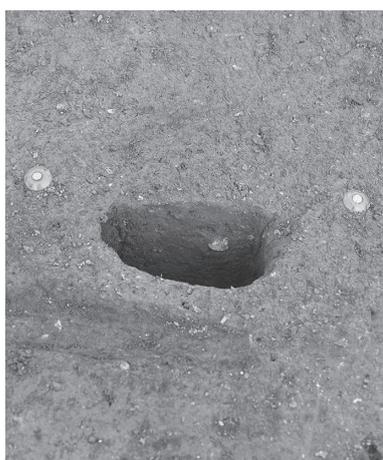
焼土7 南から



PP1 南から



PP2 南から



PP3 南から

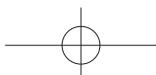
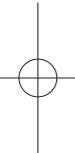


PP4 南から



PP9 南から

写真図版11 3号住(2)





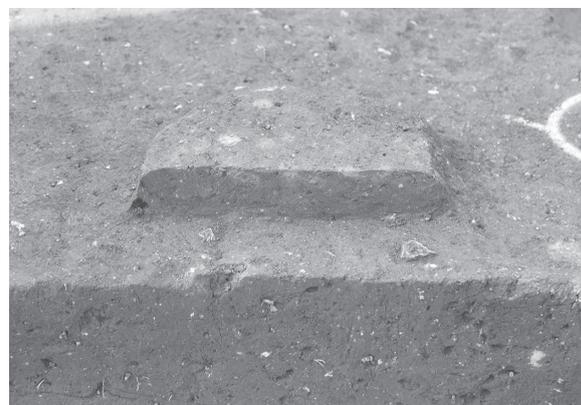
全景 東から



Aベルト 南西から

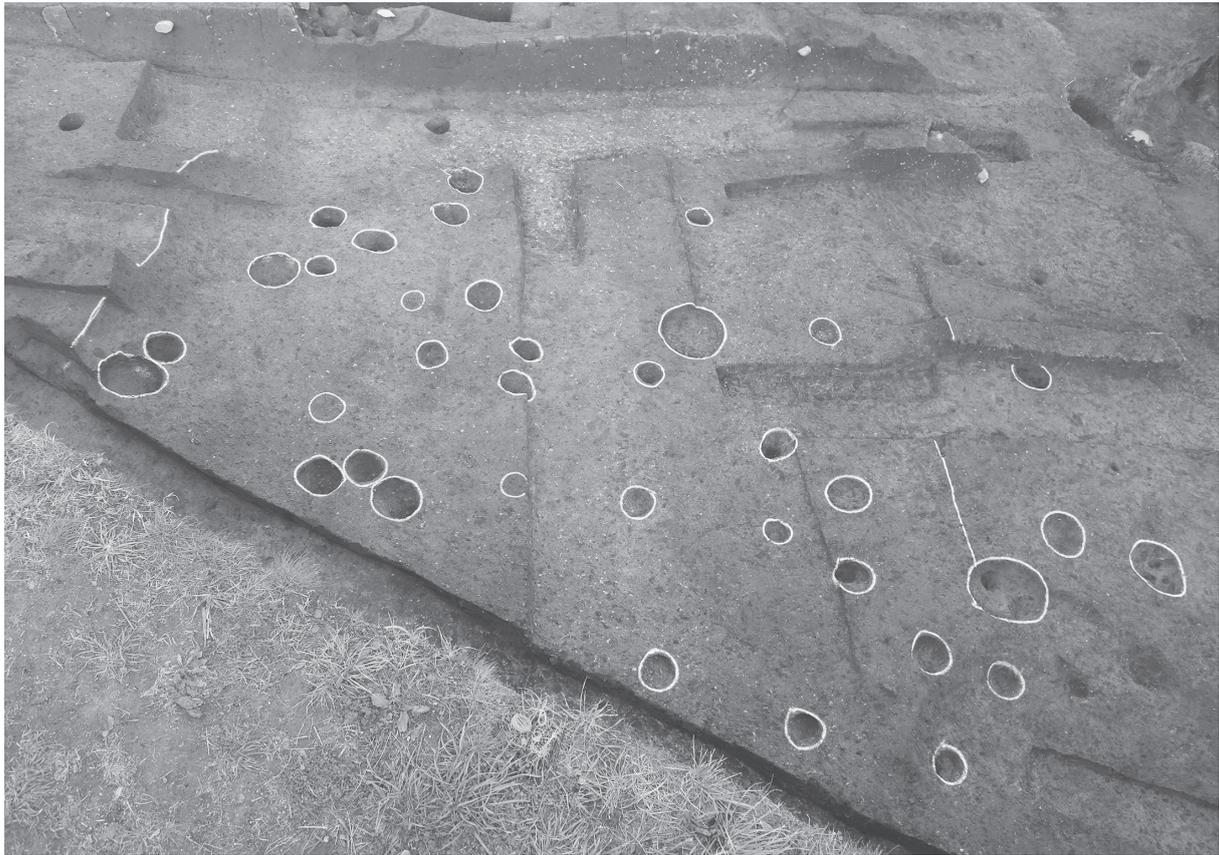


焼土1 南から



焼土2 南から

写真図版12 3号住 (3)

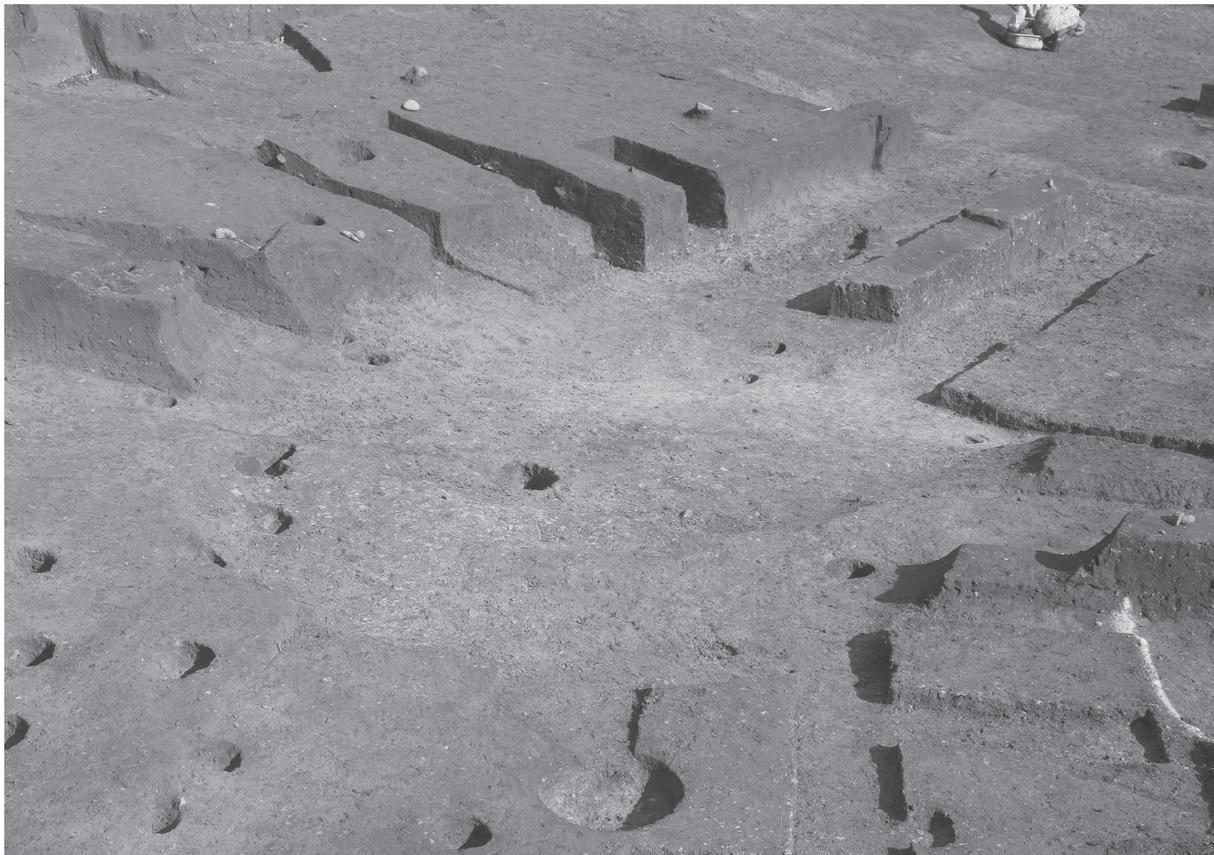


全景 西から



Aベルト 南西から

写真図版13 4号住

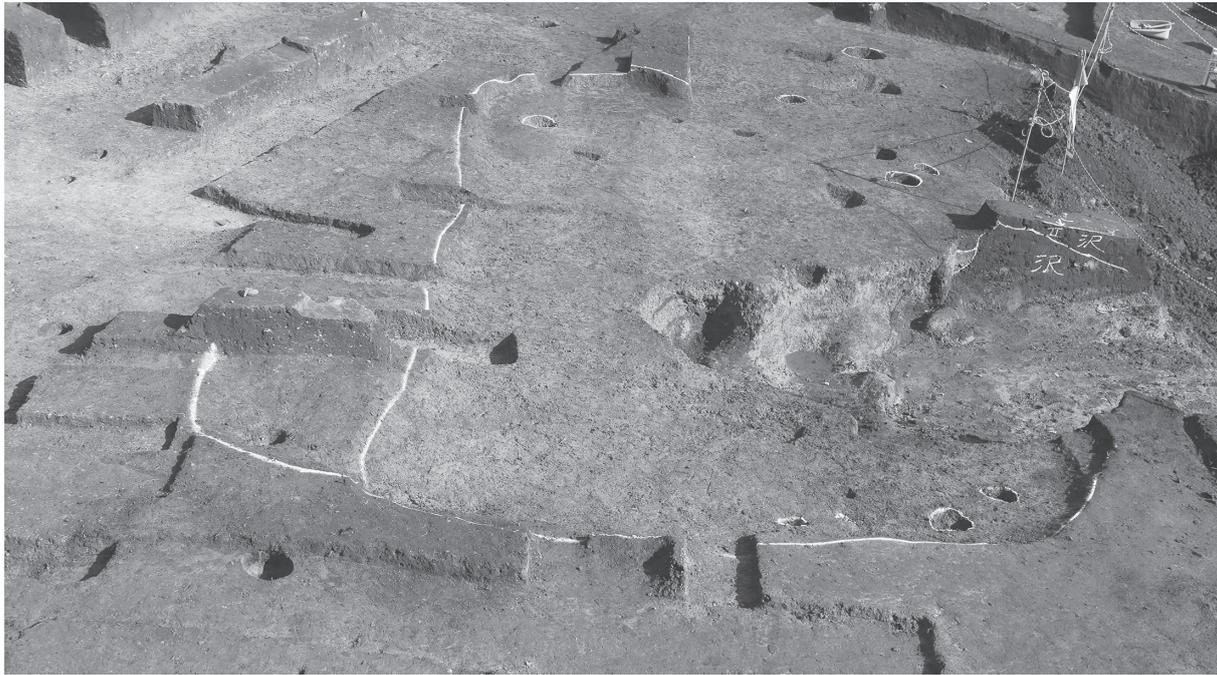


全景 南西から



全景 西から

写真図版14 5号住



6・7号住全景 西から

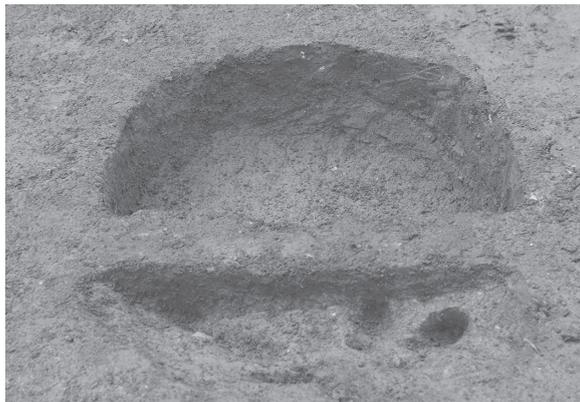


6号住Aベルト 南から



6号住Cベルト 西から

写真図版15 6・7号住



1号土坑 南西から



2号土坑 南から



3号土坑 東から



6号土坑 南から



9号土坑断面 北から



9号土坑 北から



10号土坑断面 南東から



10号土坑 北西から

写真図版16 土坑



5号焼土 南西から



9号焼土 南東から



10号焼土 南から



9(右奥)・10号焼土 南東から



10号焼土 南東から



11号焼土 南東から



柱穴状土坑分布状況 西から



1号柱穴状土坑 西から



2号柱穴状土坑 西から



3号柱穴状土坑 西から



4号柱穴状土坑 南から



5号柱穴状土坑 南から

写真図版17 焼土・柱穴状土坑



重津部集落



枝木整理作業



盛夏のトレンチ調査



人力掘削作業(1)



人力掘削作業(2)



遺構精査作業

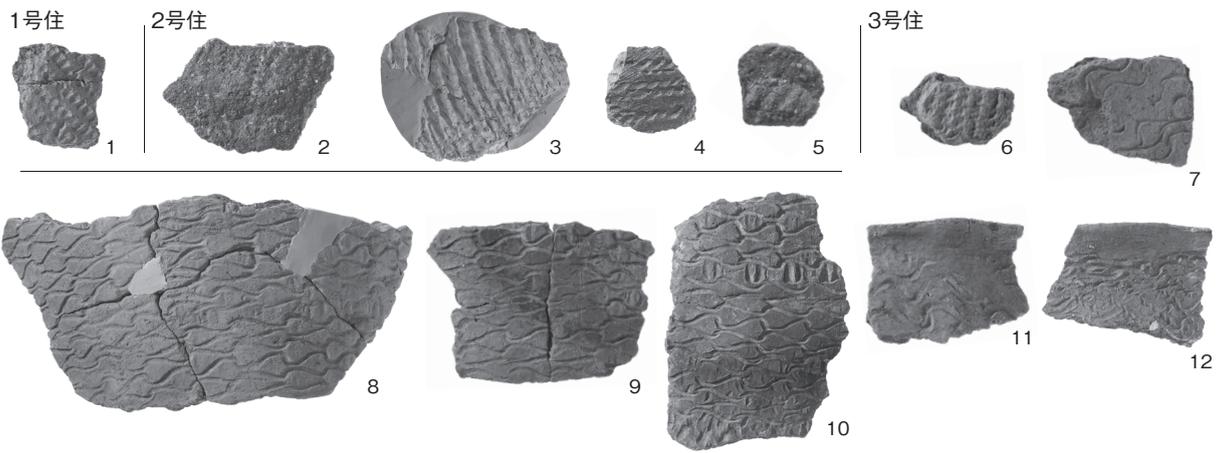


北調査区 急斜面でのトレンチ調査



北調査区 南壁地層断面清掃作業

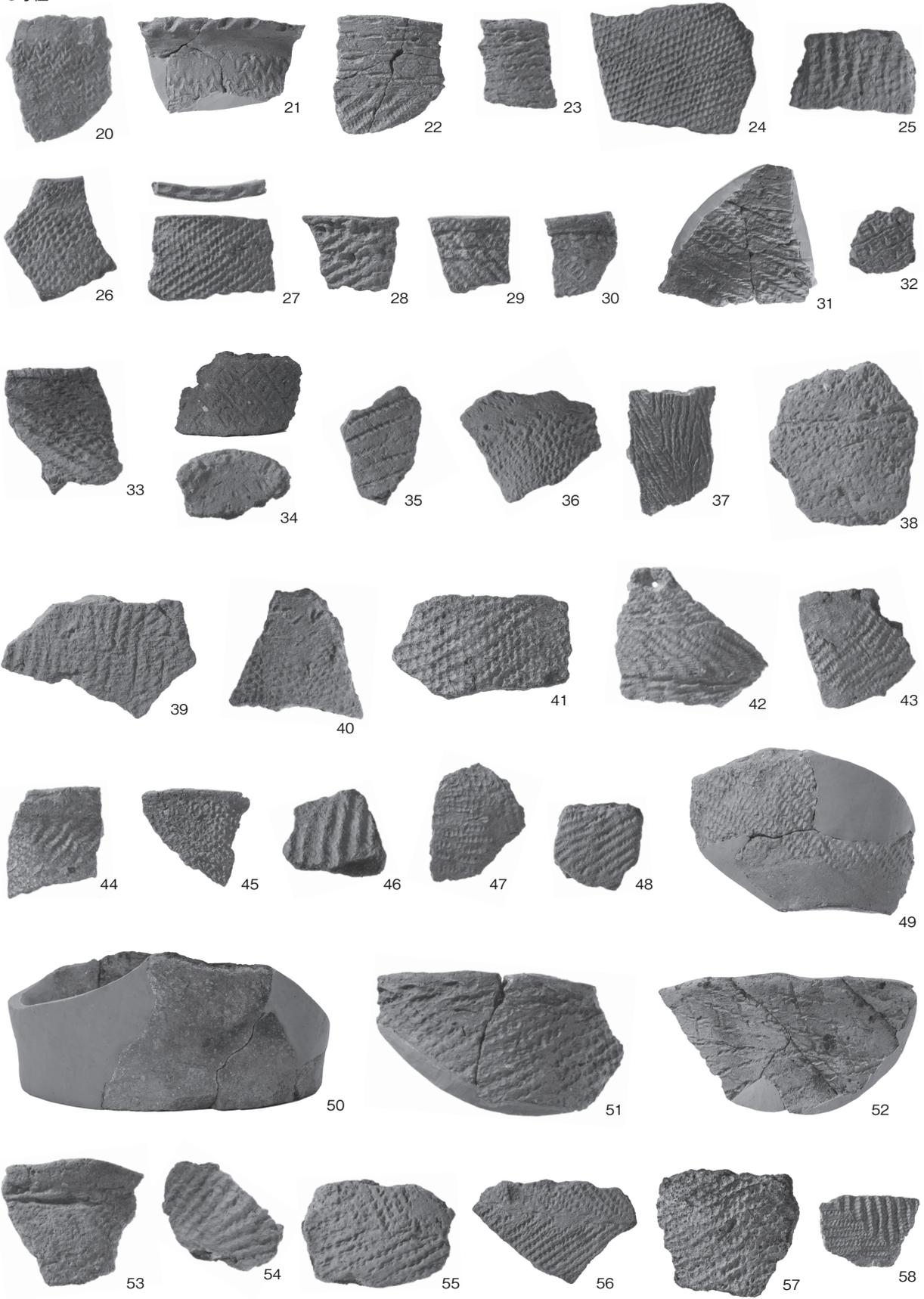
写真図版18 調査風景



S=1/3

写真図版19 1・2号住、3号住(1)土器

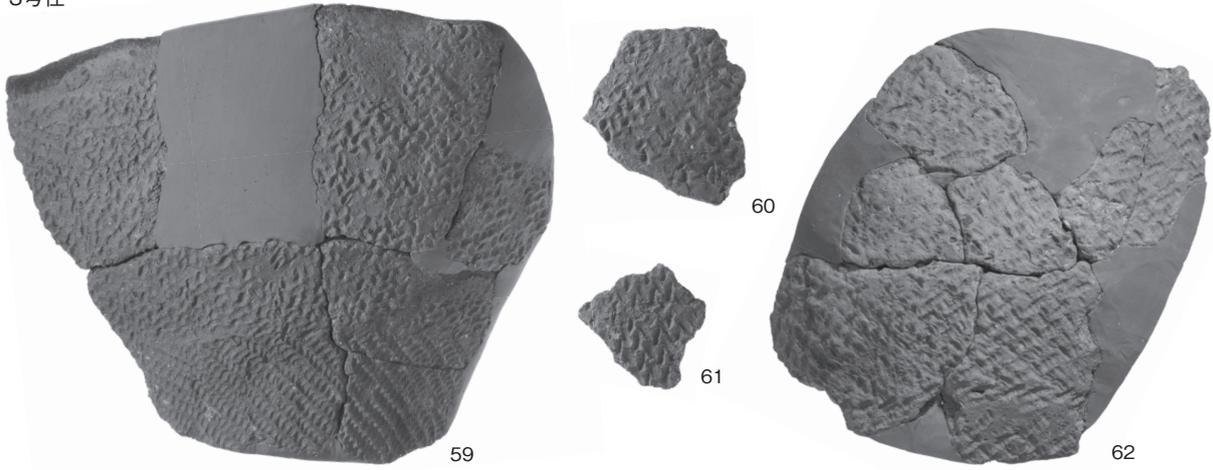
3号住



S=1/3

写真図版20 3号住 (2) 土器

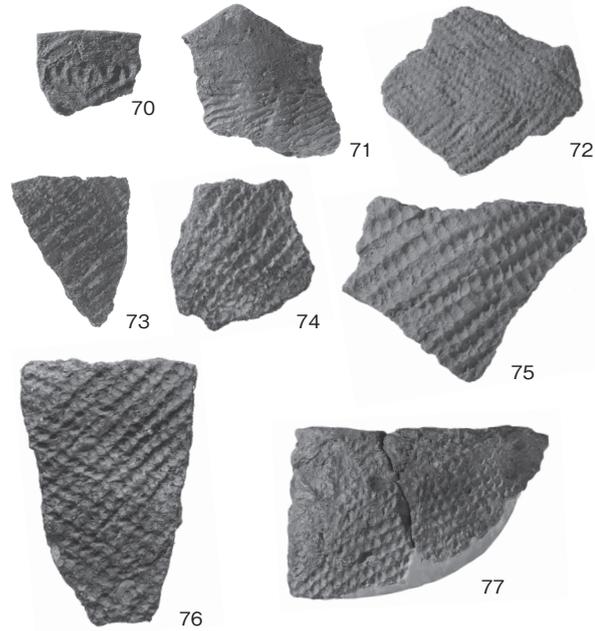
3号住



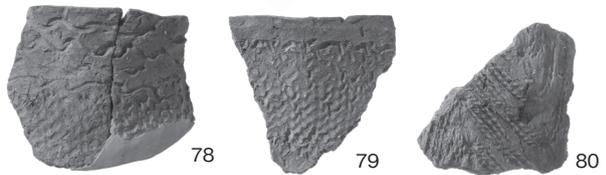
4号住



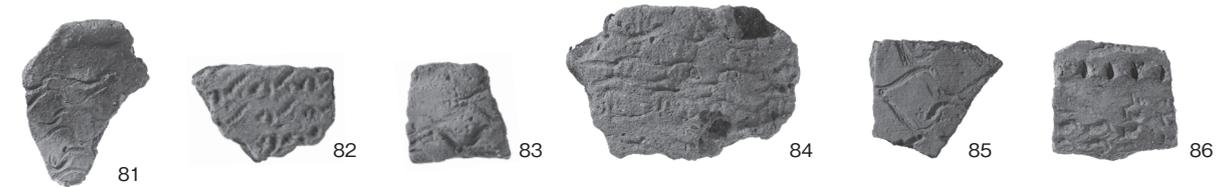
5号住



3~5号住



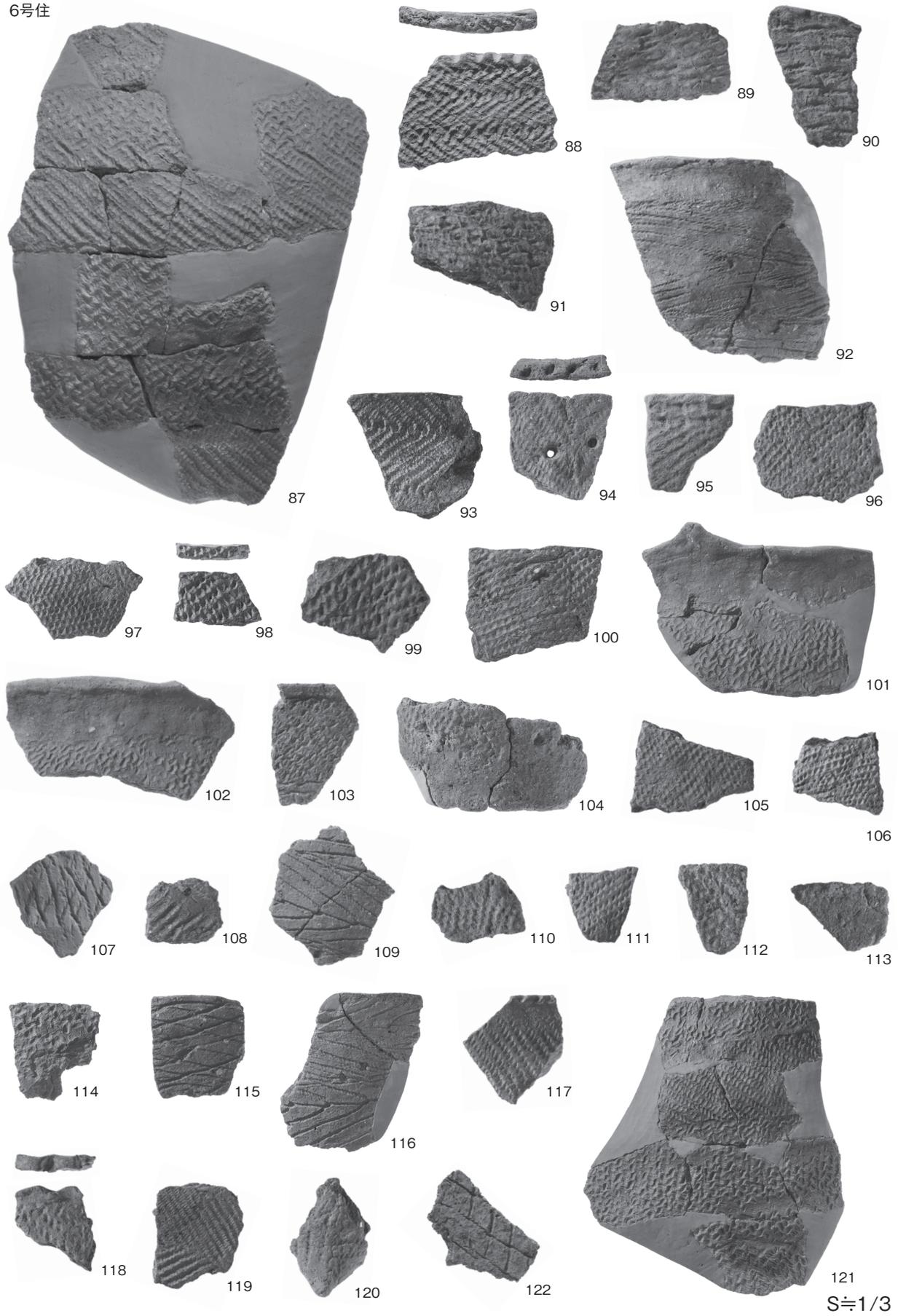
6号住



S=1/3

写真図版21 3号住(3)、4・5号住、6号住(1)土器

6号住



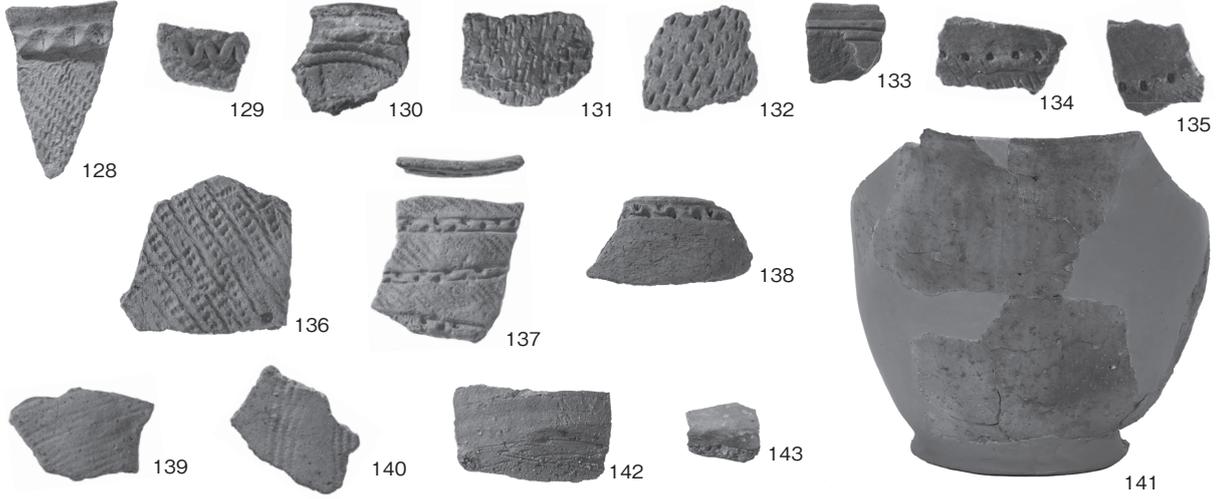
写真图版22 6号住(2)土器

7号住

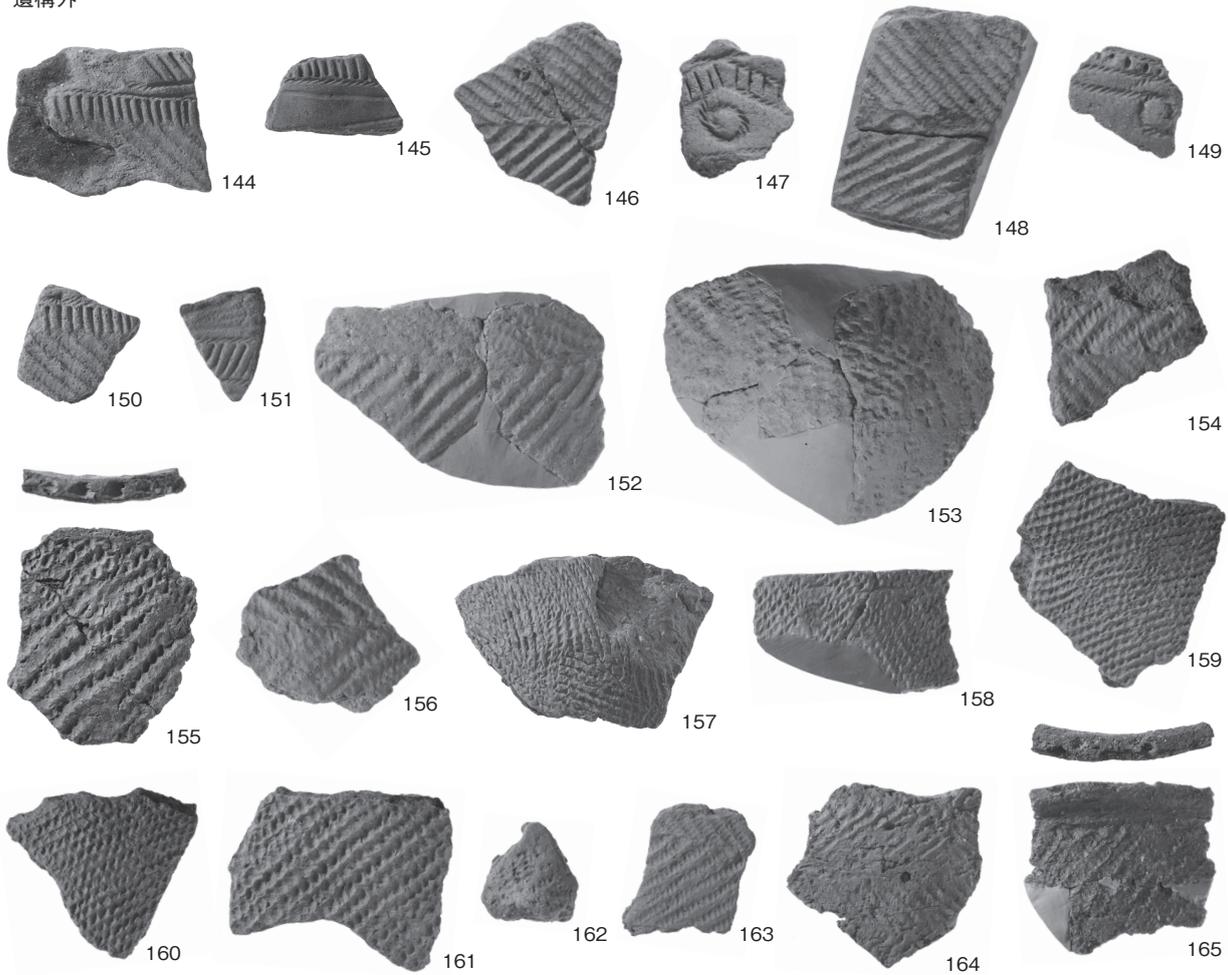
2号土坑



沢跡



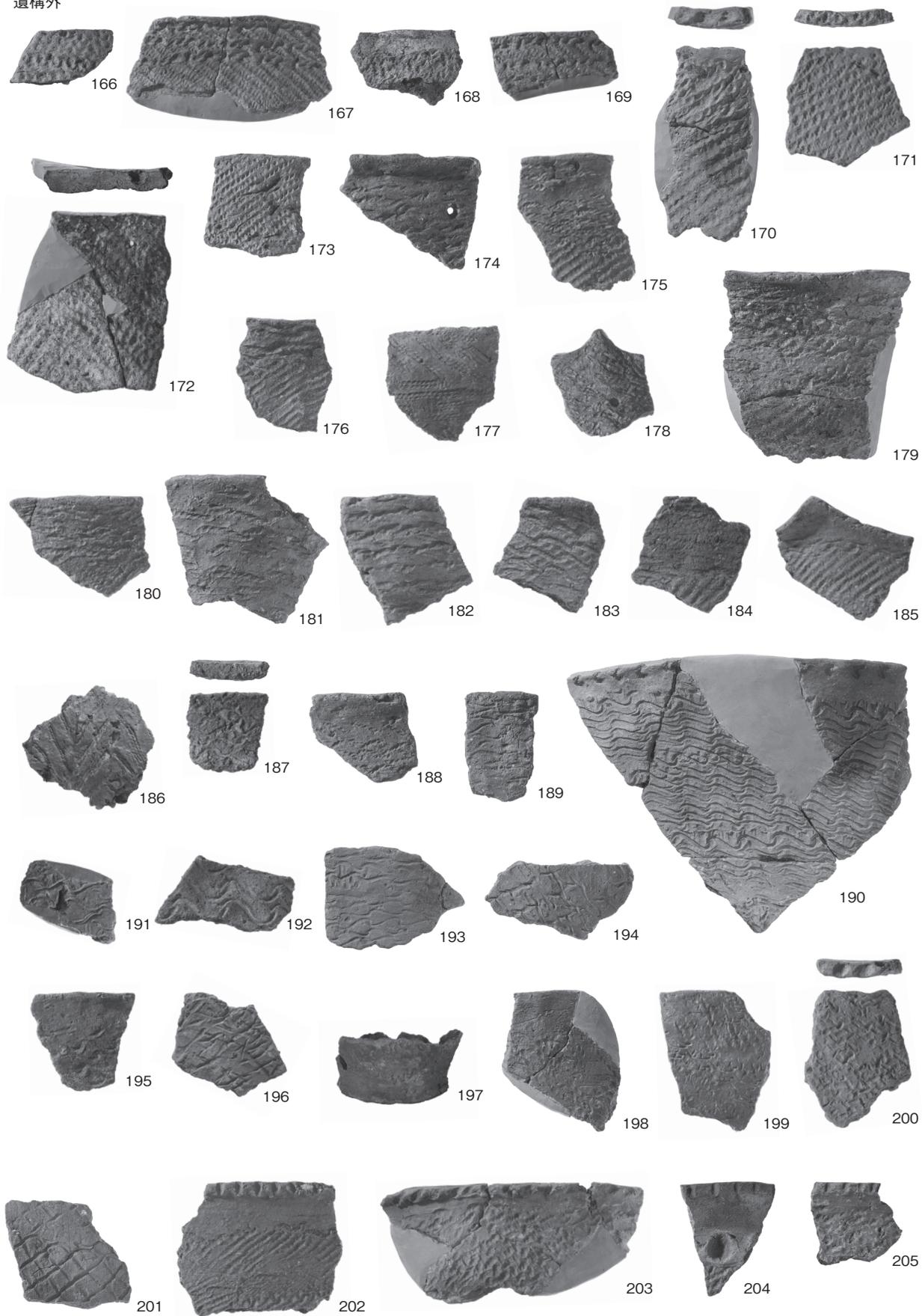
遺構外



S≒1/3

写真図版23 7号住、2号土坑、沢跡、遺構外(1)土器

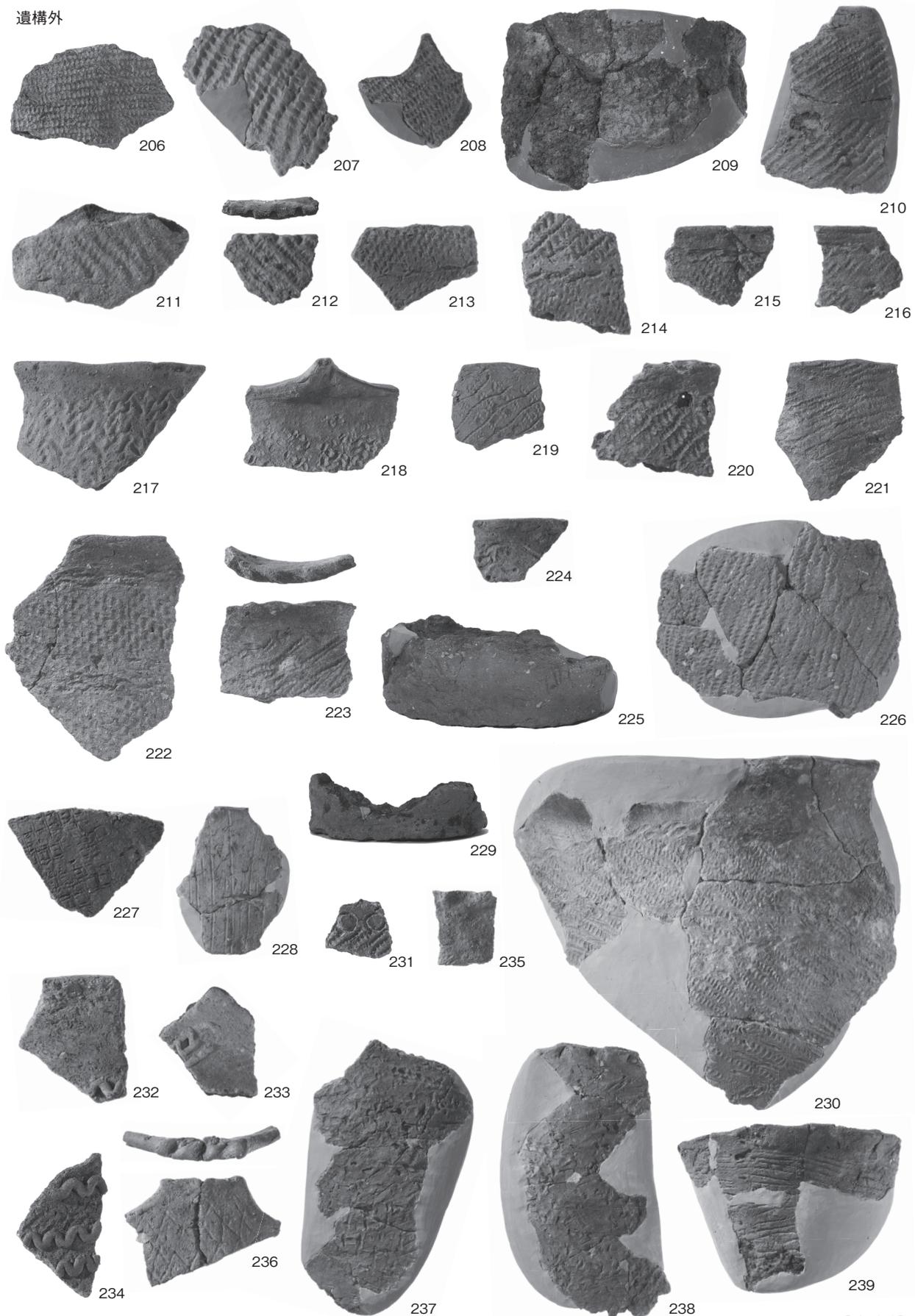
遺構外



S=1/3

写真図版24 遺構外(2)土器

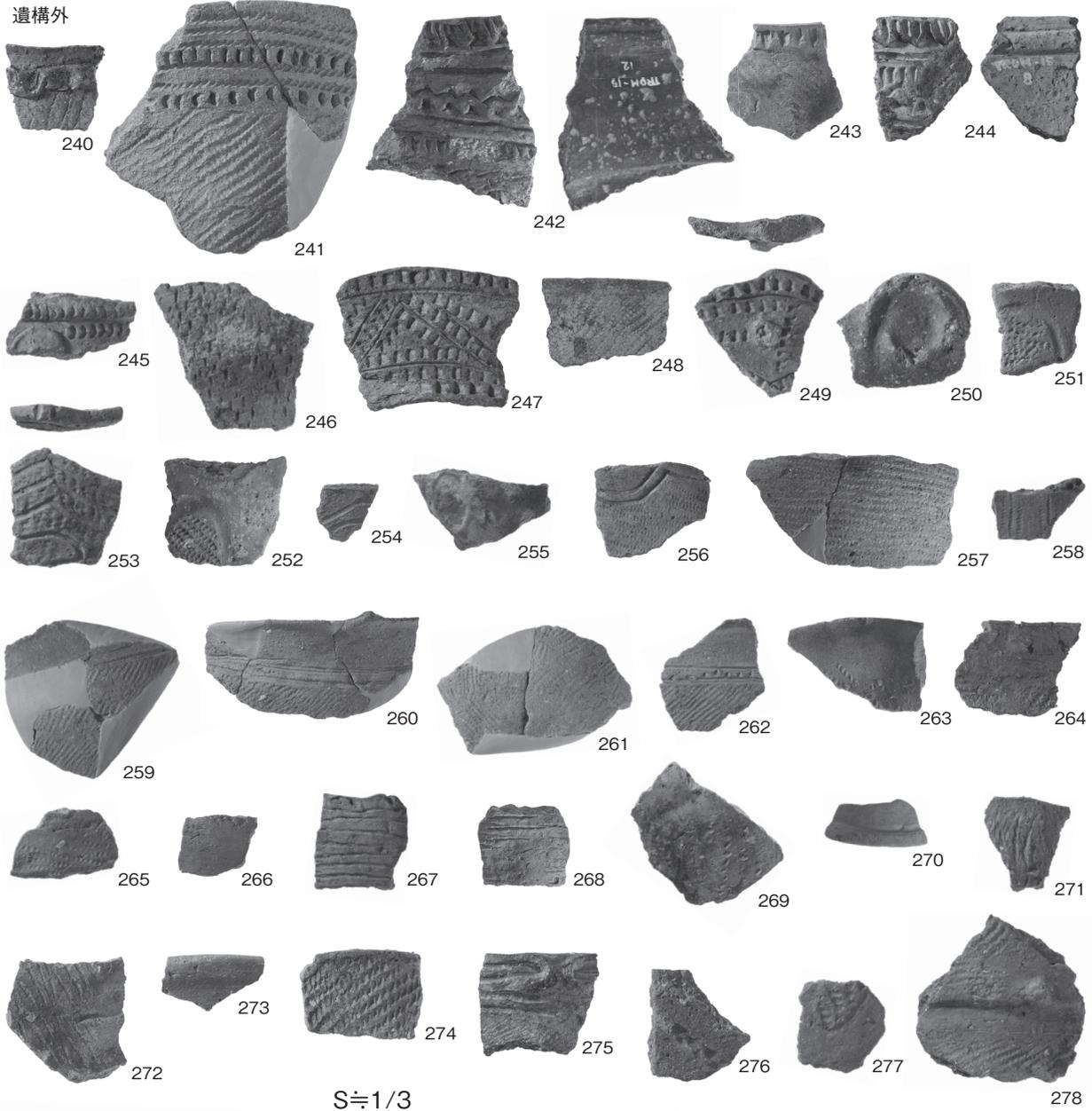
遺構外



S≒1/3

写真図版25 遺構外(3)土器

遺構外

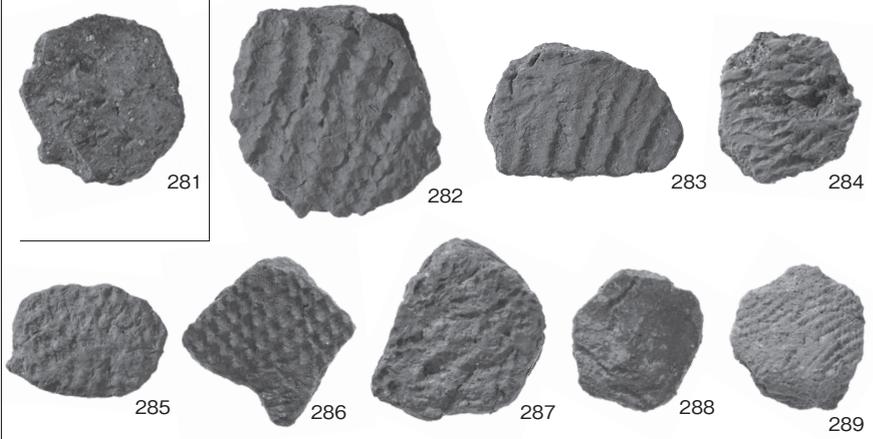


S≒1/3



沢跡

遺構外



281~289 S≒1/2

写真図版26 遺構外(4) 土器・土製品

3号住



301



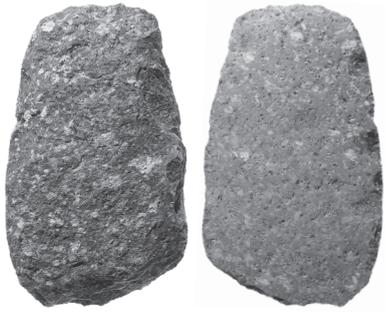
302



303



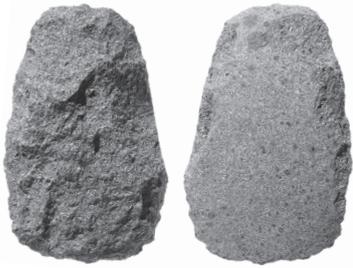
304



305



306



307



308



309

4号住



310

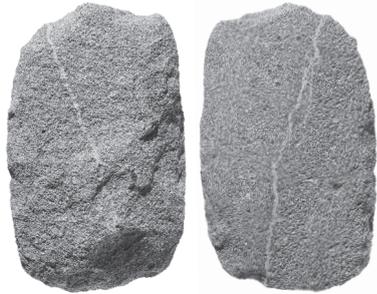


311



312

5号住



314



313

S≐1/2

写真図版27 3号住、4・5号住剥片石器

3~5号住



315



316

6号住



317



318



319



320



321

2号土坑



322

3号土坑



323

遺構外



324



325



326



327



328



329



330



331



335



332



333

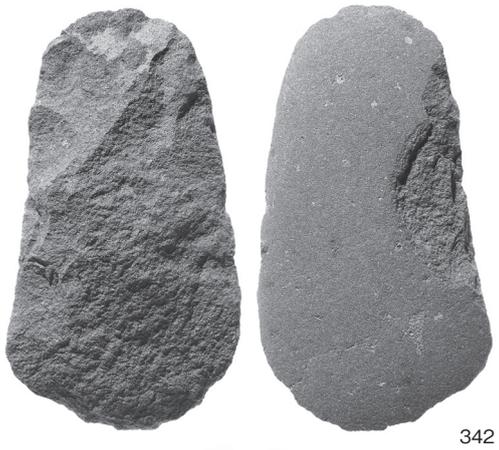
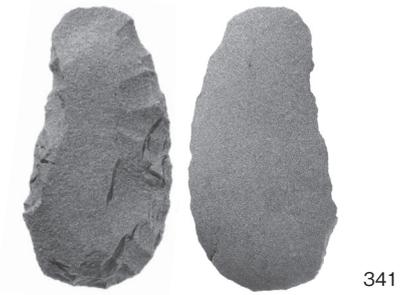
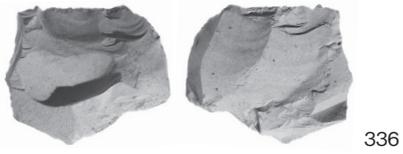


334

S=1/2

写真図版28 3~5・6号住、2・3号土坑、遺構外(1)剥片石器

遺構外



写真図版29 遺構外（2）剥片石器

遺構外



346



347



348



349

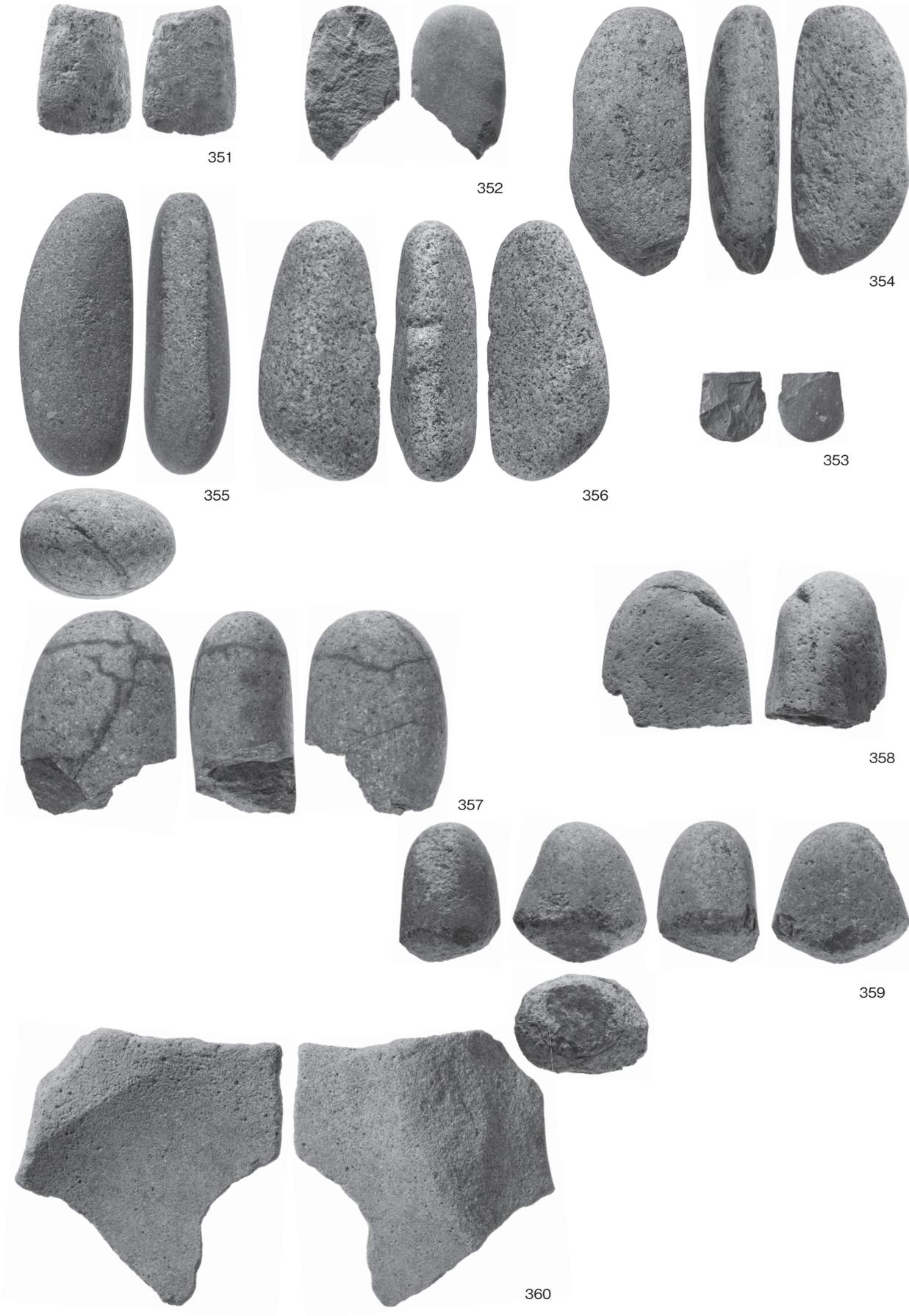


350

S≒1/2

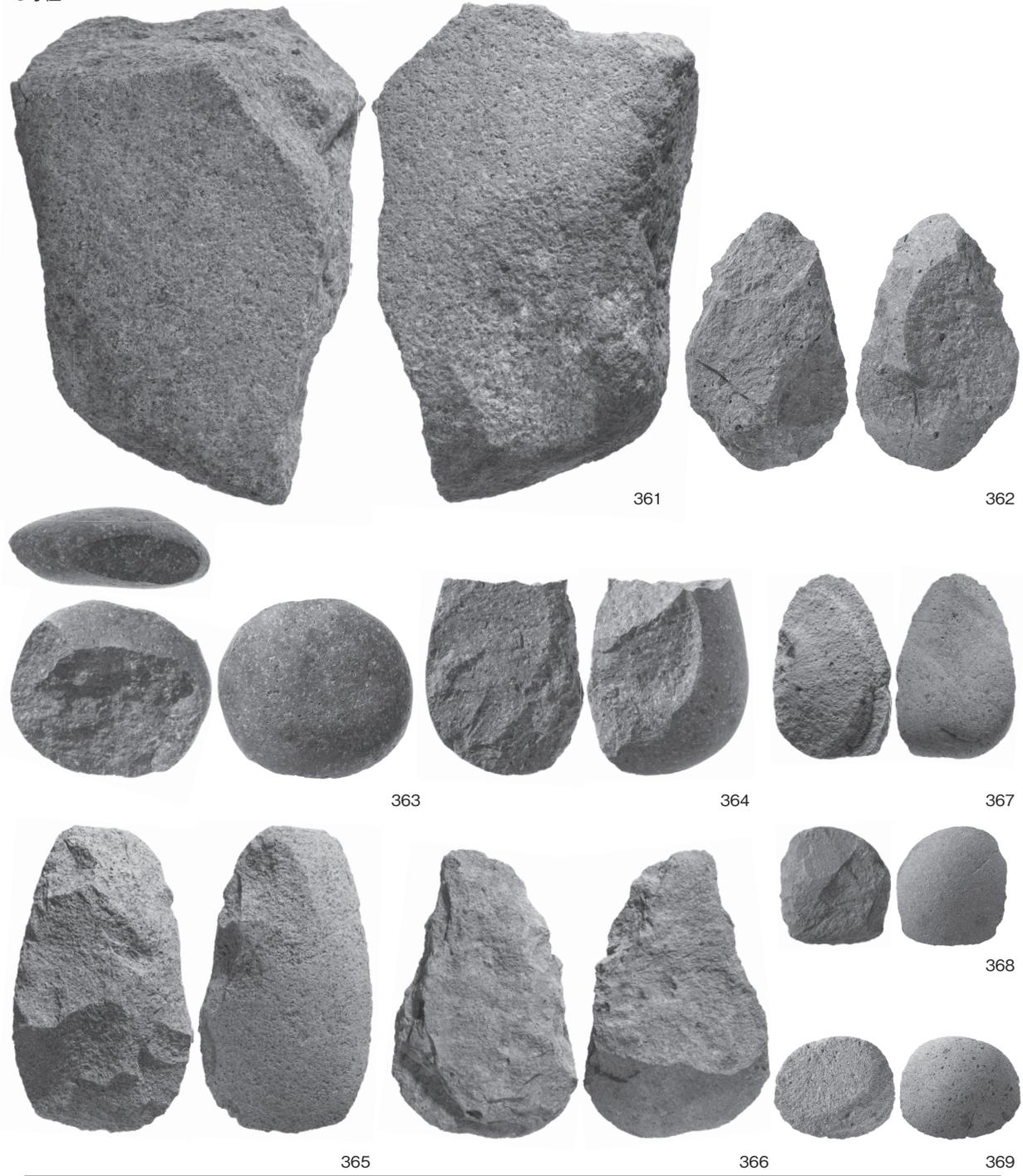
写真図版30 遺構外（3）剥片石器

3号住



写真図版31 3号住(1) 礫石器

3号住



4号住



写真図版32 3号住(2)、4号住(1) 礫石器

4号住



372



374



373

3~4号住



375

5号住



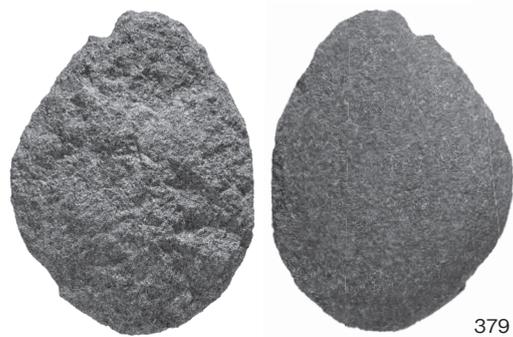
376



377



378



379



380

6号住



381



382

S=1/3

写真図版33 4号住(2)、3~4号住、5号住、6号住(1) 礫石器

6号住



383



384



385



386



387



388



389

2号土坑



391

7号住



390

3号土坑



392

5号土坑

遺構外



393



394



395



396

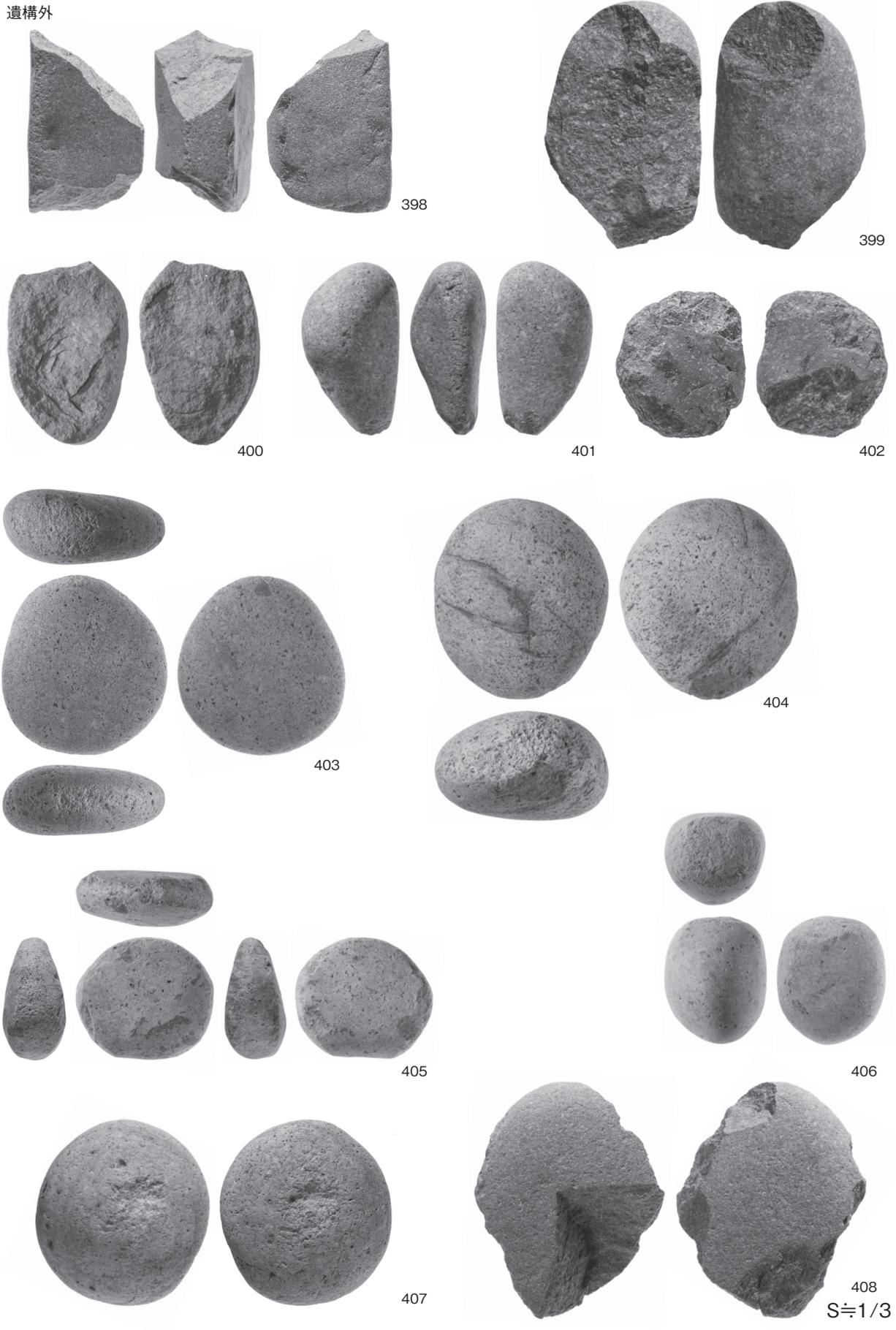


397

S=1/3

写真図版34 6号住(2)、7号住、2・3・5号土坑、遺構外(1) 礫石器

遺構外



写真図版35 遺構外（2）礫石器

遺構外



409



410

3号住



411

3~5号住



412



413



414

6号住



415

遺構外



416



417



418

S=1/3

写真図版36 遺構外(3) 礫石器・石製品

報告書抄録

ふりがな	おもつべ1いせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	重津部 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 664 集							
編著者名	星 雅之 高橋 工 對馬利彦 佐々木あゆみ							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 17 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おもつべ1いせき 重津部 I 遺跡	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 たろうあざおもつべち 田老字重津部地 ない 内	03202	KG84-1259	39度 45分 59秒	141度 59分 02秒	2015.08.03 ～ 2015.11.20	8700㎡	道路建設
				世界測地系				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
重津部 I 遺跡	集落跡	縄文 弥生 古代	竪穴住居跡 7 棟 土坑 7 基 陥し穴 1 基 焼土 5 基 柱穴状遺構 5 基	縄文土器 大 10 箱 弥生土器 30 点 古代土器 4 点 土製品 9 点 石器 大 22 箱 石製品 中 1 箱		縄文時代前期の集落 弥生時代の土器 平安時代の土器		
要約	調査地は縄文時代居住域であることがわかった。南向き斜面に 7 棟の竪穴住居と焼土、土坑などがみつかった。これらの時期は縄文時代前期でも早い段階に集中している。住居跡がみつかったのは調査区内のごく一部で、本来、地形改変を受けた斜面の上方や、調査区の西方にも集落が広がっていたものとみられる。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 664 集

重津部 I 遺跡発掘調査報告書

河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線
沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成29年 3月 7日

発 行 平成29年 3月17日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話 (019) 638 - 9001

発 行 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
〒027-0072 岩手県宮古市五月町 1 - 20
電話 (0193) 64 - 2221
(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話 (019) 654 - 2235

印 刷 第一印刷有限公司
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6 - 40
電話 (019) 646 - 6001

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017